

令和8年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第5号（8月）

令和8年7月29日
山形県病害虫防除所

〔概要〕

普通作物：**斑点米カメムシ類の発生量が多い予想です。**圃場の出穂状況をよく確認し、薬剤散布は穂揃期および穂揃期7～10日後の2回を基本とし、徹底してください。

園芸作物：**りんごのキンモンホソガの発生量が多い、りんごの斑点落葉病、おうとうの褐色せん孔病、果樹共通害虫の果樹カメムシ類の発生量はやや多い予想です。**薬剤の散布間隔があきすぎないように注意し防除を徹底してください。**秋冬ねぎの葉枯病・黒斑病、シロイチモジヨトウ、野菜花き共通のオオタバコガの発生量はやや多い予想です。**早期発見に努め、発生初期に防除を実施してください。

※ 次回の発表は8月26日の予定です。

予報内容一覧

作物名	病虫害名	発生量
いね	穂いもち	平年並
	紋枯病	やや多い
だ	斑点米カメムシ類	多い
い	マメシクイガ	平年並
ず	ジャガイモヒゲナガアブラムシ	平年並
	ウコンノメイガ	平年並
	吸実性カメムシ類	やや多い
りんご	斑点落葉病	やや多い
	黒星病	平年並
	褐斑病	平年並
	キンモンホソガ	多
日本なし	黒星病	平年並
おうとう	褐色せん孔病	やや多い
果樹共通害虫	果樹カメムシ類（り・ぶ・も・な・か）	やや多い
	ナミハダニ（り・も・な・お）	やや少ない
	ナシヒメシクイ（り・も・な）	平年並
夏秋きゅうり	炭そ病・褐斑病・べと病	平年並
	斑点細菌病	平年並
秋冬ねぎ	葉枯病・黒斑病	やや多い
	ネギアザミウマ	平年並
野菜・花き共通害虫	シロイチモジヨトウ	やや多い
	アブラムシ類（夏・す・え・き）	平年並
	ハダニ類（夏・す・え・き）	平年並
	オオタバコガ（夏・す・ね・え・き）	やや多い

下記の病虫害は、防除上注意すべき事項などについて記載しています。

作物名	病虫害名
だ	紫斑病
い	輪紋病・炭そ病
ず	灰色かび病・晩腐病、べと病・褐斑病・さび病
ぶ	せん孔細菌病、灰星病
ど	輪紋病
も	フジコナカイガラムシ
西洋なし	モモシクイガ（り・も・な）、ウメシロカイガラムシ（も・お）
か	うどんこ病、カメムシ類
果樹共通害虫	炭そ病・つる枯病、褐色腐敗病・疫病
夏秋きゅうり	さび病、ネギハモグリバエ
す	ダイズサヤタマバエ
秋冬ねぎ	アザミウマ類
えだまめ	ハスモンヨトウ（豆・夏・ね・え・き）
き	
畑作物・園芸作物共通害虫	

（ ）内 豆：だいず、り：りんご、ぶ：ぶどう、も：もも、な：なし（西洋なし、日本なし）、お：おうとう、か：かき、夏：夏秋きゅうり、す：すいか、ね：秋冬ねぎ、え：えだまめ、き：きく

山形県病害虫防除所 本所	TEL 023-644-4241	FAX 023-644-4746
庄内支所	TEL 0235-78-3115	FAX 0235-64-2382
山形県病害虫防除所トップページ	https://agrin.jp/theme/byogaichubojosho/index.html	
農作物有害動植物発生予察情報	https://agrin.jp/theme/safe_products/yosatsu/index.html	

山形県農薬危害防止運動実施中

実施期間 令和8年6月1日～8月31日

～ラベルをしっかりと確認！防除器具は確実に洗浄を！～

山形県では関係機関と連携して、農薬が最も使用される時期を重点に、農薬による事故防止と、より一層の農薬適正使用に向けて農薬危害防止運動を行っています。農薬の使用に当たっては、以下の点に注意しましょう。

1. 農薬の購入と保管管理に当たって

- ★農薬は農林水産省登録番号のあるものを、必要量だけ計画的に購入しましょう。
- ★購入時は有効年月を確認し、期限内に使用しましょう。
- ★農薬は盗難・誤用の防止等のため、鍵のかかる専用保管庫で保管しましょう。
- ★不用になった農薬を処分する場合は、農協や農薬販売店等にご相談ください。また、農薬の空容器、空袋等は、廃棄物処理業者に処理を委託する等適切に処分しましょう。

2. 農薬の使用に当たって

- ★ラベルに表示されている記載事項をよく読んで、正しく使用しましょう。
 - ①適用作物、②使用量（希釈倍数）、③有効成分ごとの総使用回数、④使用時期（収穫前使用日数）等
- ★農薬散布に当たっては、事前に周辺の生産者、養蜂家、住民等に防除計画をお知らせするとともに、周辺は場の農作物や住宅地、公共施設、家畜、河川等への飛散・流出を防止するため、次の点に十分に注意しましょう。
 - ア 風の強いときを避け、風向に気をつけて散布しましょう。
 - イ 散布量が多くなりすぎないように気をつけましょう。
 - ウ 散布の方向や位置に気をつけて散布しましょう。
 - エ 飛散しやすい細かい散布粒子のノズルは使わないようにし、散布圧力は必要以上に上げすぎないようにしましょう。
- ★散布者自身の事故防止のため、農薬の調製、散布及び防除器具の点検や洗浄を行うときは、農薬用マスク、保護メガネ、防除衣、手袋等を必ず着用しましょう。また、気温が高いときや、体調が悪いときは散布をしないようにしましょう。
- ★公園等で病害虫管理を行う時は、「公園・街路樹等病害虫・雑草管理マニュアル」（環境省ホームページで公表）を参照してください。

3. 農薬散布後は

- ★タンクやホースは確実に洗浄し、また、洗浄液が排水路や河川等に流出しないようにしましょう。
- ★農薬の使用月日、農薬名、対象作物名、使用量（希釈倍数）等を忘れずに記録し、保管してください。

4. 万が一の事故の場合

- ★農薬の誤使用等で健康被害が発生した場合には、応急処置を行い、速やかに最寄りの医療機関で処置してもらいましょう。

農薬の相談は：○食品安全衛生課(023-630-2160)

○農業技術環境課(023-630-3419)

○病害虫防除所(023-644-4241) 庄内支所(0235-78-3115)

○最寄りの各総合支庁各農業技術普及課

農薬情報は：○やまがたアグリネット <https://agrin.jp/>

毒物・劇物の相談は：○最寄りの各保健所

・山形市保健所(023-616-7261)

・村山保健所(023-627-1248)

・置賜保健所(0238-22-3872)

○健康福祉企画課(023-630-2332)

・最上保健所(0233-29-1257)

・庄内保健所(0235-66-5478)

公園等病害虫等管理

マニュアルの相談は：○水大気環境課(023-630-2339)

1. 農薬は、農林水産省登録番号のある登録農薬を必要量だけ計画的に購入する。
2. 耐性菌・抵抗性害虫の出現を防止するため、薬剤の選択及び使用回数に留意する。
3. **農薬の使用に当たっては、登録内容（農薬使用基準）を遵守するとともに、隣接地や周辺作物へ飛散しないよう十分留意する。また、事前に地域住民や周辺生産者等との連携を密にして事故防止に努める。**
4. 農薬の使用に当たっては、農薬使用者と養蜂家がお互いに連携をとりながら、農薬の使用によるミツバチへの危害を防止する。
5. 水田では、農薬散布後は7日間止水し、落水やかけ流しはしない。なお、農薬が河川中に流出しないよう畦畔の補修等を行う。
6. 農薬の空容器や空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により適切に行う。

予報根拠中の記号 (+)：発生量を多くする要因 (－)：発生量を少なくする要因

I 普通作物

1. いね

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 穂いもち	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月27日現在、葉いもちの発生量は平年並である。
 イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 茎葉散布剤による防除は穂孕後期及び穂揃期の2回を基本とし、徹底する。
 イ. 圃場の生育状況をよく観察し、適期を逃さず防除する。特に、航空防除による共同防除が天候等により適期を逸する場合は、個人防除を実施する。
 ウ. 上位葉で葉いもちの発生が多く見られる圃場や出穂期前後に降雨が続いた圃場は、穂いもちの発生が増加する恐れがあるため、穂揃期散布の7日後に追加防除を実施する。
 エ. 薬剤耐性菌出現防止のため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 紋枯病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。
 イ. 7月17日の生育調査では、いねの茎数はやや多い。(+)
 ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 圃場をよく観察し、発生が確認される場合は下表の防除要否の目安を参考に穂孕後期又は出穂期の防除を行う。
 イ. 薬剤散布を行う場合は、株元に十分付着するように散布する。

表 防除要否の目安 品種：はえぬき

判定時期	防除の判断基準
穂孕後期	発病株率 10%以上で防除
出穂期	発病株率 15%以上で防除

※1筆当たり5条おきに20株の計100株を水田中央部まで調査

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 斑点米カメムシ類 (アサジガミカ ・アヒゲホミドリカミカ)	多い

<7月2日付け 注意報第1号発表>

<7月27日付け 注意報第2号発表>

1) 予報の根拠

- ア. 7月後半の巡回調査の結果、斑点米カメムシ類の畦畔・農道等における発生確認地点率は高く、平均すくい取り虫数は多い。(+)
 - イ. 7月後半の巡回調査の結果、斑点米カメムシ類の水田内における発生確認地点率はやや高く、平均すくい取り虫数はやや多い。(+)
 - ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 薬剤散布は穂揃期および穂揃期7～10日後の2回を基本とし、徹底する。なお、出穂期が早まると予想されているので、圃場の出穂状況を確認し適期に防除を実施する。
- イ. 薬剤散布は広域で一斉に実施することで高い効果が期待できるため、地域ぐるみで実施する。
- ウ. 近年、8月後半以降の加害リスクが増加傾向にあるので、穂揃期7～10日後の薬剤散布（基本防除2回目）を実施後に水田内のすくい取り調査を行い、斑点米カメムシ類の飛来・生息が確認された場合は、基本防除2回目の防除から7～10日後に補完防除を実施する。
- エ. 水田内にイヌホタルイやノビエが多い圃場では、斑点米カメムシ類の水田内での発生が多くなるので注意する。
- オ. 水田周辺の雑草対策は、水稻の出穂期前後に行うと斑点米カメムシ類の水田侵入を助長するので原則行わない。やむをえず草刈りを実施する場合は、薬剤散布直前に実施する。または、「山形県病害虫防除基準」を参照し、対象薬剤を選定の上、薬剤散布後1週間以内に実施する。
- カ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

2. だいで

(1) 紫斑病

圃場の開花状況を確認し、開花期25～35日後に遅れないように薬剤散布を行う。なお、薬剤散布を行う場合は、莢に薬剤が付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) マメシクイガ	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は平年並である。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 連作圃場や前年発生が多かった圃場では、生息密度が高くなる傾向があるので、8月下旬（8月25日頃）及び9月上旬（前回散布10日後）の2回薬剤散布を行う。
- イ. 薬剤散布を行う場合は、莢に薬剤が付着しないと十分な防除効果が得られないので、ていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) ジャガイモ ヒゲナガアブラムシ	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量はやや多い。(＋)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。(－)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 8月以降急激に増加することがあるので、現在発生が少ないところでも定期的に圃場を見回り、葉裏の寄生状況をよく観察する。本種の寄生虫数や吸汁痕の増加が見られる場合には、速やかに薬剤散布を行う。

イ. 薬剤散布を行う場合は、薬剤が葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(4) ウコンノメイガ	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量はやや少ない。(－)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

8月上旬頃から被害(葉巻)が目立ち始めるので、圃場をよく観察し、被害が多い場合は防除を行う。特に、生育の旺盛な圃場や葉色の濃い圃場で多発生する傾向があるので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(5) 吸実性カメムシ類	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量はやや多い。(＋)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

発生が多い圃場では、開花期 25～35 日後に薬剤散布を行う。

Ⅱ 園芸作物

1. りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 斑点落葉病	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 8月中旬までは重点防除時期なので、発生が見られる園では薬剤防除を徹底する。

なお、品種ごとの収穫開始時期を考慮し各薬剤の総使用回数、収穫前使用日数を厳守する。

イ. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高める。

ウ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 黒星病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量はやや少ないが、一部の園地では新梢上位葉で病斑が確認されている。

イ. 7月下旬に連続して感染好適条件が出現している。(＋)

ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 発病葉及び発病果は、二次伝染源となり、その胞子の飛散時期は収穫まで長期間に渡るため、見つけ次第摘み取り適切に処分する。

イ. 薬剤散布に当たっては、不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高めるとともに、十分量(5000以上/10a)の薬液をていねいに散布する。また、スピードスプレーヤーで防除する場合は、走行速度や散布経路に注意し、散布ムラを防ぐ。

ウ. 薬剤散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行うとともに、散布間隔があきすぎないようにする。なお、降雨が続く場合は、雨の合間を見て防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 褐斑病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 例年発生の見られる園では、発生初期の防除を徹底する。

イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

ウ. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高めるとともに、散布ムラが生じないようにていねいに薬剤散布を行う。

(4) 輪紋病・炭そ病

降雨が続くと果実への感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。また、炭そ病の発病果は二次伝染源となるので、見つけ次第摘み取り適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(5) キンモンホソガ	多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月27日現在の発生量は多く、一部で被害葉率が高い園が確認されている。(＋)
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 園内をよく見回り、被害が見られる園では、第3世代成虫の発生盛期にあたる8月中旬に散布ムラがないよう薬剤散布を行う。
- イ. 被害が多い園では、「山形県病害虫防除基準」を参照し、効果の高い薬剤で防除を実施する。

2. ぶどう

(1) 灰色かび病・晩腐病

発病果房は二次伝染源となるため、見つけ次第摘み取り適切に処分する。なお、取残した房で発病すると来年の伝染源となるため、圃場に果房を残さないようにする。

(2) ペト病・褐斑病・さび病

デラウェアは収穫終了後、直ちに薬剤散布を行う。なお、大粒種では8月以降もペト病の発生が増加する恐れがあるので、8月上旬～中旬に防除を行う。

3. も も

(1) せん孔細菌病

7月27日現在の発生量はやや少ない。今後、降雨が続くと発生量が多くなるので、以下の対策を実施する。

- ア. 発病葉や発病果は二次伝染源になるので、見つけ次第摘み取り適切に処分する。
- イ. 台風の通過等により早期に落葉すると、落葉部位からの感染が多くなるため、台風の通過や降雨前に薬剤防除を徹底する。
- ウ. 品種ごとの収穫開始時期を考慮し、各薬剤の総使用回数、収穫前使用日数を厳守する。

(2) 灰星病

7月後半の巡回調査では果実腐れの発生は確認されなかったが、中生種では、8月上旬まで重要な防除時期に当たるので防除を徹底する。薬剤散布を行う場合は、収穫開始時期を考慮し農薬使用基準を遵守する。また、園内の見回りを徹底し、発病果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。

4. 西洋なし

(1) 輪紋病

今後、降雨が続くと感染が多くなるので、以下の対策を実施する。

- ア. 薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。
- イ. 果実への感染を防止するため、キャプタン・有機銅剤を使用する防除体系では、散布間隔を10日以上あけないようにし、本剤散布後からの積算降水量が100mmに達する前に次の薬剤散布を行う。

5. 日本なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 黒星病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 発病葉及び発病果は二次伝染源となるため、園内の見回りを徹底し、見つけ次第摘み取り適切に処分する。
- イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。
- ウ. 薬剤散布の際は、薬液到達性を高めるため、不要な徒長枝はせん除し、散布ムラが生じないように、十分量(300ℓ以上/10a)の薬液を散布する。
- エ. 特に、園周縁部等の薬液のかかりにくいところでは、スピードスプレーヤの走行速度を下げる等により、ていねいに散布する。

6. おうとう

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 褐色せん孔病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月27日現在の発生量は平年並であるが、一部で発病葉率の高い園が確認されている。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 降雨によって発生が急激に増加する恐れがあるため、園内をよく見回り、発生状況に注意して、10～14日間隔で薬剤散布を実施する。
- イ. 薬剤散布に当たっては、徒長枝や樹冠上部の葉まで薬液が付着するよう十分量の薬液をていねいに散布する。なお、薬剤散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に散布する。
- ウ. 本病の葉への感染は秋季まで長期に渡るため、9月上旬まで薬剤散布を実施する。
- エ. 薬剤の選定に当たっては翌年の収穫までの総使用回数を考慮して使用する。

7. かき

(1) フジコナカイガラムシ

発生が多い園では、8月中旬～下旬に薬剤散布を行う。薬剤散布に当たっては、枝幹や葉、へた部に十分付着するようていねいに散布する。

なお、薬剤選定に当たっては果樹カメムシ類の発生動向にも注意し、果樹カメムシ類の発生が多い場合は「山形県病害虫防除基準」を参照し、果樹カメムシ類にも効果のある薬剤を選定する。ただし、抵抗性出現防止のため、同一系統薬剤の連用は避ける。

8. 果樹共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ・チャバネカメムシ)	りんご・ぶどう・もも ・なし・かき	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量はやや多い。(＋)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 気温や湿度の高い日に果樹カメムシ類の飛来や吸汁加害が多くなりやすい傾向がある。7月中旬頃から新成虫が発生し、密度が高まっているため園内を十分に見回り、樹上の寄生や被害果の発生に注意する。

イ. 園内で成幼虫の寄生や卵塊、被害果が確認される場合は、速やかに捕殺するとともに薬剤散布を行う。

ウ. 薬剤の選定に当たっては「山形県病害虫防除基準」を参照し、カメムシ類に効果のある薬剤で防除を実施する。なお、りんご、もも、なしでは、シンクイムシ類にも効果のある薬剤を使用する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) ナミハダニ	りんご・もも・なし ・おうとう	やや少ない

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量はやや少ない。(－)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. ナミハダニは高温・乾燥条件で急増する場合があるので、園内をこまめに観察し、ハダニ類の成幼虫数が1葉当り3頭以上見られたら殺ダニ剤を散布する。

イ. 園内を除草する場合は、除草後に下草から移動したナミハダニにより樹上密度が高まることがあるので、下草が枯れるまで待ってから殺ダニ剤を散布する。

ウ. 樹冠内部への薬液到達性を高めるため不要な徒長枝はせん除し、薬液が葉裏や樹冠上部の葉にも十分付着するようていねいに散布する。

エ. 収穫時期が近い樹種では、薬剤の収穫前使用日数に注意する。

オ. 薬剤の選定に当たっては「山形県病害虫防除基準」を参照し、薬剤抵抗性出現防止のため、同一系統の薬剤は年1回の使用とする（気門封鎖剤は除く）。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) ナシヒメシンクイ	りんご・もも・なし	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. もも、なしの果実は特に被害を受けやすいので、園内をよく見回り、心折れや被害果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。

イ. 8月以降も被害が継続するため、薬剤の散布間隔があきすぎないように適切に防除を実施する。なお、被害が見られる園では、薬剤の選定に留意する。

(4) モモシンクイガ（りんご・もも・なし）

園内をよく見回り、被害果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。なお、8月以降も被害が継続するため、薬剤の散布間隔があきすぎないように適切に防除を実施する。

(5) ウメシロカイガラムシ（もも・おうとう）

第1世代幼虫の発生時期がやや早く、8月1日からの気温は高いと予報されていることから、第2世代幼虫（体長0.3mm程度の橙黄色の幼虫）の防除適期は8月上旬と例年（8月中旬）より早まる可能性がある。そのため、樹冠上部までよく観察し、薬液が枝幹部に十分付着するように散布する。特に白い粉状の雄繭殻が多く付着している枝周辺には、薬液がしっかりとかかるようにいねいに散布を行う。なお、ももで薬剤散布を行う際は、収穫開始時期を考慮し農薬使用基準を遵守する。

9. 夏秋きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 炭そ病・褐斑病 ・べと病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に持ち出し適切に処分する。

イ. 薬剤散布は予防防除を基本とし、葉裏まで薬液が付着するよう十分量の薬液をていねいに散布する。

ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

エ. 過繁茂にならないよう適切な肥培管理を行い草勢維持に努め、葉かきをこまめに行い、通風をよくする。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 斑点細菌病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 圃場をよく見回り早期発見に努め、発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に持ち出し適切に処分する。

イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

(3) うどんこ病

乾燥が続いたり、草勢が低下すると発生が多くなるので、適切な肥培管理を行い草勢維持に努め、圃場をよく見回り発生初期の防除を徹底する。なお、発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に持ち出し、適切に処分する。

(4) カメムシ類（クサギカメムシ・チャバネアオカメムシ）

カメムシ類（主にクサギカメムシ）が果実を加害することで、くぼみや奇形の症状が発生するため、圃場で成幼虫の寄生や卵塊、被害果が確認される場合は、速やかに捕殺や薬剤散布を行う。

10. すいか

(1) 炭そ病・つる枯病

7月27日現在、発生量はやや少ないが、降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。薬剤散布は、薬液が葉裏や株元及び果実まで十分付着するようていねいに行う。

(2) 褐色腐敗病・疫病

7月27日現在、一部圃場で発生が確認されている。降雨で圃場に雨水等が滞水した場合は、突発的に発生することがあるので、直ちに排水を行うとともに、防除を行う。また、降雨が続く場合は雨の合間を見て薬剤散布を行う。なお、発病果は直ちに除去し適切に処分する。

11. 秋冬ねぎ

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 葉枯病・黒斑病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月27日現在の発生量はやや多い。(+)
 - イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. カルシウム資材の定期的な葉面散布により、葉先枯れの発生を防止する。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行い、散布予定日に降雨が予想される場合は前倒しして降雨前に散布を行う。
- ウ. 株全体に十分に薬液を付着させるため、薬剤散布は十分な薬液量でいねいに行う。
- エ. 葉枯病は、秋季に発生する黄色斑紋病斑の原因となるため、例年発生が多い圃場では特に防除を徹底する。一部の品種（夏扇パワー等）では発生しやすいため特に注意する。

(2) さび病

7月27日現在、発生は確認されていない（平年初確認：6月中旬）が、降雨が続くと発生が多くなるため、以下の対策を実施する。

- ア. 肥切れや多肥栽培で発病が多くなるので、適切な肥培管理を行う。
- イ. 潜伏期間が長いため、発生前から防除を行う。
- ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行い、散布予定日に降雨が予想される場合は前倒して散布を行う。
- エ. 一部の品種（関羽一本太等）では発生しやすいため注意する。
- オ. 発生が見られた場合は、圃場内で広く感染している恐れがあるため、速やかに薬剤散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) ネギアザミウマ	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 高温乾燥が続くと急激に増殖する場合があるため、圃場を見回り早期発見に努め、発生初期から薬剤散布を行う。
- イ. 既に密度が高まっている圃場では、密度が下がるまで防除間隔を狭め、継続して薬剤散布を行う。
- ウ. 薬剤散布の際は株全体に薬液を付着させるため、十分量の薬液をていねいに散布する。
- エ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なるグループの薬剤で輪用散布を行う。

(4) ネギハモグリバエ

7月27日現在の発生量はやや少ない。今後、高温が続くと密度が高まるため、圃場をよく観察し早期発見に努め、密度が高くなる前に薬剤散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(5) シロイチモジヨトウ	やや多い

1) 予報の根拠

ア. フェロモントラップにおける7月5半旬までの総誘殺数は、県予察圃場(寒河江市)でやや多い。(+)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 圃場をよく見回り早期発見に努め、卵塊や被害葉、幼虫は見つけ次第取り除き適切に処分する。

イ. 幼虫の齢期が進むにつれ防除効果が低下するため、見つけ次第速やかに防除する。

ウ. 薬剤散布後も圃場をよく見回り、被害の拡大が見られる場合には、作用性の異なるグループの薬剤を散布する。

エ. 薬剤散布の際は株全体に薬液を付着させるため、薬剤散布は十分量の薬液をていねいに散布する。

オ. 今後も台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、通過後に注意深く圃場を見回るとともに、発生予察情報等により発生動向の把握に努める。

カ. 本種はねぎ以外の園芸作物も広く加害するため、早期発見・早期防除に努める。

12. えだまめ

(1) ダイズサヤタマバエ

高温が続くと発生が多くなるので、幼莢期の防除を徹底する。なお、薬剤散布の際は、薬液が莢に付着するよう十分量の薬液を散布する。

13. きく

(1) アザミウマ類

7月27日現在の発生量は平年並である。アザミウマ類はトマト黄化えそウイルス(TSWV)を媒介し、今後、高温が続くと密度が高まるため、以下の対策を実施する。

ア. 雑草での増殖及び圃場への飛来を防止するため、圃場内及び周辺の除草を徹底する。

イ. 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。花蕾を加害されると品質低下をまねくので、薬剤散布の際は薬液が花蕾部にも十分付着するようていねいに散布する。

ウ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なるグループの薬剤で輪用散布を行う。

14. 野菜・花き共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) アブラムシ類	夏秋きゅうり・すいか ・えだまめ・きく	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬液が生長点部分や葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) ハダニ類	夏秋きゅうり・すいか ・えだまめ・きく	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月27日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに散布する。

イ. 薬剤を散布する場合は、薬剤抵抗性出現を防止するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) オオタバコガ	夏秋きゅうり・すいか ・秋冬ねぎ・えだまめ ・きく	やや多い

1) 予報の根拠

ア. フェロモントラップにおける7月5半旬までの総誘殺数は、県予察圃場（寒河江市）及び地区予察圃場（酒田市）でともにやや多い。（＋）

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 果実、花蕾、新芽等の内部に潜り込んで食害するため、圃場をよく見回り、早期発見に努める。

イ. 被害を受けた果実、花蕾、新芽等は、内部に幼虫が生息している場合があるので適切に処分する。

ウ. 幼虫の寄生や被害が見られる場合は、直ちに薬剤散布を行う。なお、株全体に十分に薬液を付着させるため、作物ごとの生育ステージに応じて十分量の薬液をていねいに散布する。

エ. 薬剤抵抗性の出現を防止するため、作用性の異なるグループの薬剤で輪用散布を行う。

オ. 台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、通過後に注意深く圃場を見回るとともに、発生予察情報等により発生動向の把握に努める。なお、飛来源の散布実績により薬剤の効きにくい成虫が飛来することがあるので、散布4～5日後に観察し、若～中齢幼虫が生きたまま多く見られる場合には薬剤の選定に留意する。

15. 畑作物・園芸作物共通害虫

(1) ハスモンヨトウ（だいず・夏秋きゅうり・秋冬ねぎ・えだまめ・きく）

フェロモントラップにおける7月5半旬までの総誘殺数は、県予察圃場（山形市）ではやや少なく、地区予察圃場（鶴岡市）では平年並である。今後、台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、以下の対策を行う。

ア. 本種は広食性で、だいず、果樹、野菜、花き等多くの作物を加害するので、圃場をよく見回り、早期発見に努める。

イ. 卵塊や、ふ化直後の幼虫の集団が見られる葉は、取り除き適切に処分する。

ウ. 幼虫の齢期が進むにつれ薬剤の防除効果が低下するため、卵塊確認時や被害発生初期に防除を行う。

エ. 薬剤抵抗性の出現を防止するため、作用性の異なるグループの薬剤で輪用散布を行う。

[発生予察情報で使用する時期、量の表現の基準]

1. 時期

平 年 並	平年値（過去10か年の平均）を中心として前後2日以内
やや 早 い	平年値より3～5日早い
ややおそい	平年値より3～5日おそい
早 い	平年値より6日以上早い
お そ い	平年値より6日以上おそい

2. 量（発生量、発生面積及び被害量等）

過去10年間の値を、発生が多い順に下図のように並べ、本年の値との比較により求めます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
←多い→	← やや多い →	← 平 年 並 →					← やや少ない →		←少ない→

東北地方 1か月予報 (07/25～08/24)		
2026年07月23日14時30分 仙台管区気象台 発表		
特に注意を要する事項	2週目は気温がかなり高くなる可能性があります。	
向こう1か月 07/25～08/24	天候	東北日本海側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率50%です。
1週目 07/25～07/31	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
2週目 08/01～08/07	気温	2週目は、東北日本海側で高い確率60%、東北太平洋側で高い確率50%です。
3～4週目 08/08～08/21	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	東北日本海側	向こう1か月 07/25～08/24	20 30 50
		1週目 07/25～07/31	20 50 30
		2週目 08/01～08/07	10 30 60
		3～4週目 08/08～08/21	20 30 50
	東北太平洋側	向こう1か月 07/25～08/24	20 30 50
		1週目 07/25～07/31	20 50 30
		2週目 08/01～08/07	10 40 50
		3～4週目 08/08～08/21	20 30 50
降水量	東北地方	向こう1か月 07/25～08/24	30 30 40
日照時間	東北地方	向こう1か月 07/25～08/24	40 30 30

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)